アリジゴク ―― 砂に潜む地獄

家の床下など、乾燥した砂地にすむウスバカゲロウ類の幼虫は、アリジゴクの名前で親しまれています（図1）。すり鉢状の巣をつくってその底に潜み、獲物がうっかり脚を滑らせて落ちると、砂をぶつけて穴の底へと落とし、捕食するというさまは、多くの人々が子供の頃に見たことがあるでしょう。

しかし、アリジゴクが巣をつくるところを最初から終わりまでじっくり見たことがある人は、かなり根気強い人に限られるかもしれません。一度外へ掘り出したアリジゴクを再び砂の上に置くと、脚を使わず腹部を伸び縮みさせて後ずさりしながら潜っていきます。そして、頭を使って砂を弾き飛ばしつつ、その場で大きくぐるぐる回りはじめます。やがて、その回転を小さくすぼめていき、最終的に1時間ほどかけて、見慣れたすり鉢状の巣を完成させるのです（図2）。なお、アリジゴクという名前がついていますが、捕獲可能なサイズであれば、アリに限らず巣に落ちたあらゆる小動物が餌になります。

アリジゴクは、巣に落ちて傾斜を這い上がろうとする獲物に対して頭を捻り、砂をすくい取るようにしてはぶつける行為を繰り返します。そして、脚を踏み外して巣の中心へ転落した獲物に噛みついて捕らえます。アリジゴクは、獲物の肉体をバリバリ食うわけではありません。アリジゴクのもつ巨大なキバは、中空のストローのようになっています。これを獲物の体内に突き刺して、中身を吸い取ってしまうのです。獲物を倒し、カラカラになるまで獲物を吸い尽くすと、アリジゴクは勢いよく頭を打ち振って、獲物の死骸を遠くへふっ飛ばします。

この要領で次々に獲物を狩って摂取しつづけ、やがて十分に成長すると、アリジゴクは砂の中で丸い繭をつくり、その中で蛹（さなぎ）になります。そして数週間後、あの美しい成虫の姿へと変わるのです。

しかし、すべてのアリジゴク、もといウスバカゲロウ類の幼虫が、すり鉢状の巣をつくるわけではありません。なかには、巣らしいものをつくらない種も存在します。

例えば、コマダラウスバカゲロウ *Den-*

図1　クロコウスバカゲロウの集団営巣。開けた河川敷の、水際から離れた砂地で見かける。

droleon jezoensis は薄暗い場所の、地衣類が着生した垂直な岩肌にへばりついて獲物を待ち伏せます。獲物が這い登ってくる頻度が高いのか、少し内側にえぐれて斜めになった岩肌についていることが多いようです。

カスリウスバカゲロウ *Distoleon nigricans*（図3）やオオウスバカゲロウ *Heoclisis japonica* は、開けて日当たりのよい砂地に直に潜るだけです。偶然獲物がそこを通りか

図2　ウスバカゲロウの幼虫の営巣。このケースでは1～6に至るまで、40分ほど費やした。

図3　カスリウスバカゲロウの幼虫。すり鉢状の巣をつくらず、砂に浅く潜るだけ。

かると、突然砂の中から躍り出て食らいつき、地中に引きずり込んでしまいます。こうした種にとっては、生息する砂地全体が獲物を捕らえる巨大な罠のようなものでしょう。

巣をつくるつくらないにかかわらず、アリジゴクは待ち伏せ型の捕食者なので、獲物が至近に寄ってこない限りは捕獲できません。つまり、攻撃の射程が非常に短いため、獲物を捕獲できる機会がめったにないのです。

また、巣をつくるタイプのアリジゴクは、一度その場所に巣をつくってしまうと、たとえそこが獲物のほとんどやってこない場所であっても、容易によそへ移動しません。そのため、自然下において安定して栄養を摂取できないアリジゴクは非常に成長が遅く、蛹になるまで時に2～3年も費やすといわれています。